

現代の名工・盆栽手入道具！

●川澄寛国さんの特別講演から

一昨日行われた「第5回 地域職域同窓会責任者会議」の2部は特別講演で、講師は高校21回の川澄寛国さんで「現代の名工」でした。

◆川澄寛国さん：昭和25年生まれ、川口市朝日在住、(株)昌国代表。刃物製造業（盆栽手入道具・各流生花用鋏・園芸用刃物）。平成24年度の「卓越した技能者」通称「現代の名工」（厚生労働省）で表彰を受ける。「MASAKUNI」は盆栽用具の代名詞ともされる存在です。更に、技術を応用し、医療用具など様々なものに取り組んでいます。2代目昌国が我が国初の刃物博物館を開設、歴史的学術的にも貴重な刃物類が多数展示【昌国利器工匠具博物館】開館：午前9時～午後4時入場無料



*

◆刃物製造の家に生まれて

ご紹介いただきました川澄です。昨年の秋に「現代の名工」の認定を受け、この楯【写真②】と表彰状と副賞10万円をいただきましたが、副賞は女房のところに行ってしまったようで、同窓会に寄付することができませんでした。



私のところは、初代の昌国が水戸藩出身者で最初は苗木の生産をやっていたのですが、苗木を剪定するための鋏や刃物も造る鍛冶屋でもありました。関東大震災で川口に移り、熱心に研究を行い、盆栽手入用具の開発に務めました。父は大正12年10月1日に生まれておりますので、関東大震災の時には祖母のお腹の中、無事に震災を乗り切ったから今の私がいまいます。父も二代目昌国として、刃物製造を行い、現在の会社にしてきました。

私は、そんな刃物工場で遊んでいましたので、いずれは長男として家業を継ぐのだらうと漠然と思っていたのですが、浦高に入り進学について悩んだ時期がありました。しかし、刃物というのは人類の長い歴史とともにあったものであること、刃物製造をやっている人が少ないこと、面白いのではないかと考えたこと、家業・宿命であり、それ自体が幸運なことではないかと考え、この世界に入りました。

*

◆刃物はエッジが勝負処

刃物というのは、鋼の部分、エッジが勝負処なのです。良い刃物というのは全てにおいて欠陥がないものでなくてはなりません。特に切れ味を決めるエッジがしっかりとしていなくてはなりません。それには材料が一番大切です。鉄は鍛錬といって叩くわけですが、叩けば叩くほど良くなると言われてもいますが、ただ叩けば良いものではありません。素晴らしい職人というのは正規分布でほんの少ししかいませんので、名刀として名の残っている作品は、その名工たちが改良に改良を重ねてできたものです。私は、最終目標・結果を決めてから考えるようにしています。そのためには最新の技術を使うことも大切です。

材料も同じで、さまざまなものを使ってみました。ファインセラミックスのナイフ【写真③】を作ったのですが、硬くてナイフとしては良いのですが、鋏には向きません。高圧で焼いたものはさらに1.5～2倍も強いのですが1980年代から進歩がありません。



*

◆盆栽道具

盆栽は世界中で愛好されています。古くはアメリカ、最近ではフランス、イタリア、スペインと世界中に広まっています。そんな中で、昌国の道具は100人中99人が知っていると言っても過言ではありません。盆栽は鉢で生きている限りは1000年も生きます。それを生かすためにも切れ味の良い道具が必要になってきます。切れ味が良いと痛くありませんし、切った傷がすぐにふさがるのです。私は、平成10年に樹木医になりましたが、父が道具について、私が樹木医としてアドバイスをを行う形で英文の「盆栽・秘密のテクニック」【写真④】という本を出しました。日本では風雪に耐えた山の樹木を取ってきて盆栽に仕立てることができなくなりましたが、スペインなどではまだまだそれが可能です。良い盆栽を造り残していきたいと思います。そのための道具を私はこれからも造っていきたいと考えています。

最近、医療用の鋏を注文されて作ったのですが、良いものすぎて長く使えるため、当初の予想よりも出荷数がないという苦労もあります。

これからも良い材料を使って、独自の技術で良い道具を作り続けたいと考えています。（完）

